

第1回香美市立図書館及び美術館収蔵庫建設等検討委員会

平成28年7月12日(火) 18:30~20:50

出席委員：内田純一委員・大岸真弓委員・岡花瞳委員・岡林良浩委員・式地美智委員・
田中信一委員・中村直人委員・野村貴子委員・濱田久美子委員・濱田正彦委員・
町田由岐子委員・山重壮一委員・山本祥子委員・山本恭弘委員・依光美代子委員（15名）
事務局：時久恵子教育長・小松美公教育次長・
生涯学習振興課（久保和昭課長・和田小百合班長・依光静代主幹）
図書館（佐竹慶子館長・黒岩絵里主幹）
美術館（都築房子館長・松岡可奈主幹）

会議内容

1. 教育長あいさつ
 2. 委嘱状・辞令書交付
 3. 委員及び事務局自己紹介
 4. 検討委員会の説明（スケジュール、要綱等）
 5. 委員長・副委員長選出、委員長・副委員長あいさつ
 6. 各委員からの意見
 7. その他
-

委員長・副委員長選任結果

委員長／中村直人委員

副委員長／濱田正彦委員

副委員長／山本恭弘委員

施設についての意見

○図書館のコンセプト

- ・ゆるやかなスロープが続いて成長していく図書館。
- ・何か決めてからでないと図書館にいけないというのをできるだけ無くすことに力を入れ、生活のいろんな場面で図書館に行くことと解決したり、専門のところにつながることで、困った時には図書館に行こう、という雰囲気広がればいい。（図書に関する事以外でも、相談や情報提供が大事）
- ・入口が低くて広い奥が深いということを実際にできることがコンセプトとして大事。
- ・ネットワーク化も人的資源の限界性があると考えられる。工科大生などを出して知的ネットワークのコンシェルジュなどをはじめ、市民が全体でどういうふうを支えるかというのが非常に重要なコンセプト。

- ・飲料を飲みながらくつろぐ環境とした場合、カフェを入れてその収益で本を買うといった機能を分化させてもたせるなど、経営であがった利益を市民に還元するシステムを設ける。そのための環境整備や質の向上は、企業努力のようにやってもらいたい。目指さないと図書館そのものの高機能化はできない。市税だけで支えて行けば人口が減る市では限界がでてくる。いろんな機能をつけていかないといけない。
- ・図書館で商売をしたらいけないというわけではなく、その行政としての基準をきちんともてばいい。大学のマネジメントなどもあるので組んでやると可能性が広がるのではないか。
- ・市役所の中に図書館機能があったり、図書館、学校の図書室とのやりとりから、待つだけでなく、届けるコンセプトがもう少し必要。
- ・届ける事で思いもよらない関心が生まれたりする。関心と呼び覚ます、触発する積極的な発想が目指す姿としては必要。

○図書館の役割

- ・今の図書館の傾向は、勉強をするだけでなく、そこでくつろいだり、本以外の貸し出しもする。
- ・本を置いてある場所ではなく、人が集まるところ。人間が豊かになっていく場所。
- ・知的好奇心があることや、人との出会いがある。
- ・(本などで) 調べたり題材にすることができるので、図書館での会議などが流行っている。
- ・新図書館をネットワークの拠点として、市内の小学校から大学までの図書館がつながるようにし、同時に産官学民でいう「産」の市内書店ともつながるものを。
- ・公共図書館が県と市町村がネットワークでつながっていることを考えると、香美市でなくてはならない部分を重点化させる。
- ・市町村の図書館が住民と向き合って読みたい本をそろえる事が基本。足りない部分は県立図書館が補い貸し出すが、県はすべての市町村が相手。市は市で資料費をつけていく必要がある。
- ・資料の要求には必ずこたえられる図書館。全てを図書館で対応するわけではなく、専門のところにつなげられる。

○美術館収蔵庫との連携

- ・美術品を展示したり、ちょっとした観劇ができる小ホールがあり、芸術にも触れられる場所があるといい。
- ・美術品の前で音楽が聴けるホールのようなスペースがあるといい。
- ・ミニギャラリーのようなものがあって、一般の希望者の小さな展覧会が開けるようなもの。使用しないときは収蔵作品の小ぶりなものを気軽に見ていただくなどの活用ができるのでは。そういった部屋が小さくても一角にあると様々な活用ができる。
- ・美術館のあるまちに誇りを抱くためにも、文化の拠点であってほしい。ハード面になるかもしれないが、文化的な匂い香り立つところが実現できるといい。
- ・本庁での収蔵品展示のように差しさわりがないものを選ぶなどして、施設内で展示できれば。

- ・美術収蔵品のあつかいは図書館との兼ね合いが難しい部分もあるが、芸術文化とどうつなげるかというところは検討余地がある。
- ・収蔵庫があることでディスプレイしてどう見せるかということで、ぜひリンクできる部分はリンクしながら保管とセキュリティの面で配慮しながらできるようにしたい。

○飲食

- ・お茶をしながら静かに読書できる図書館がいいという声を聞く。
- ・図書館での飲み物の扱いは、閲覧室でなく別の場所がいい。一定のコーナーを決める。
- ・貴重な資料でなければ多少飲み物も飲んでいいということもしていいと思う。なんでもかんでもとなると汚くなってしまう。
- ・飲みながらでないと集中できない部分もある。すべて許可をしてしまうと匂いが充満するなど考えられるので、フタつきの飲み物までならいい、という方向で工科大では話し合っている。
- ・地元でつくられたタンブラーなら持ち込みOKなども考えてはどうか。

○新たなサービス（時間）など

- ・星の図鑑といっしょに天体望遠鏡も貸し出してもらえるような。
- ・新図書館では特色を。例えば絵本が全部そろふなど。
- ・本と関連する講師を探すのに、学習に関連することに詳しい人とをつなぐ人材バンク的なことができればいい。
- ・中学生は6時まで部活をしているので借りたい本を借りにいけないと考えた時に閉館時間が遅ければ子ども達も寄れるのではないか。
- ・本好きの子が最初からたくさんいるとは限らないが、小さい時から色々な本に触れさせたいという思いがある中で、親御さんが忙しく遅くまで働いている人や家庭に絵本がない家庭も結構ある。忙しい親御さんが図書館に通う事自体があるだろうか、という思いもあるが、夕方仕事帰りに寄れるように、毎日是不可能だと思うが曜日を定めるなどして遅くまで開けることで誰もが利用しやすいと思う。
- ・館の特性として同じ内容が何か国語でも出ているような絵本などをいれると楽しいのでは。
- ・学習を進めて行く時にいろんな方法があつて良い。映像だけ見ている調べたくなったり、音で聞いてやりたいと思ったり、何から入ってもいいので、自ら学習していこうというふうになればいい。きっかけをいろいろな所で与えられ、図書館は一定集約したメディアになっている。

○「届ける」

- ・館で待っているのではなく、届ける事をもう少し重視できないか。
- ・図書館という場で交流することも大事だと思うが、行きたくても行けない人もでてくる。山の方の方に住んでいる方もいる。待っているのではなく、読みたいというリクエストに応じて届けるというの。
- ・特別支援学校では子どもの増加によって、図書館も教室として使わざるを得ない状況。その中で本に触れ合う読書活動をどうつくるかだが、絵本をラックに1杯見つくるって届けてもらい、教

室に置いて本に親しみ、一定期間で交換する。図書館が届けてくれるといったことは実現可能な範囲ではないだろうか。

- ・大きな車でなくてよい、移動図書館があるといい。山間部に入って行けると随分読書活動が変わってくる。
- ・ネットワーク化は切実な問題。探している資料が市内の他の学校にあるかもしれない。しかし、見えないため、電話やファックスを駆使して探している。学校からの資料の要望は、県立からの貸し出しでは間に合わない。届けるということが実行できたらいい。

○地域・郷土資料について

- ・打ち刃物やフラフについてなかなか情報がない。こういった情報を発信できる図書館。
- ・市民に支えられる図書館には図書館を身近な存在の場所にしないといけない。(地域の事等)何か研究したものを図書館で地域に発信していく。発信したものは全国全世界に公開できるようなインターネットに載せて情報発信していくのもいいのでは。
- ・地域のことについて、書籍や他の媒体でもアクセスできて調べられるような広がり。
- ・地域・郷土を知るための資料を映像なども含めて提供できるといい。

○電子書籍やデジタルツールについて

- ・全国的にみると電子書籍のサービスを入れている図書館でもそんなには使われていない。
- ・情報入手手段としての媒体はすぐ変わっていく(아이폰はできて数年)ので、そのあたりが非常に大切。
- ・eライブラリの機能であれば同時に何人かがその本を借りて何週間か読める。自宅にいても図書館と繋がっている。学習を距離(時間)を置かないで次々に進めていけるような装置のシステムが基本的にたちあがっている。
- ・マルチダイジェー図書や点字翻訳ソフトなど、障害者に向けてはデジタルが親和性が高いと思われる。読むのは苦手だが耳からは伝わりやすいこともある。高齢者や障害者に向けてはデジタルのほうが取り組みやすい気がする。
- ・(多様な言語で)書いてあるものをそろえるのもいいが、いろんな言語で読んでもらう方も重要。 아이폰等の機能で何か国語でも対応できるので、操作を教えてくれる人がいればいいと思う。そんなきっかけで、他の国の言葉を覚えたいと思ったり。色んなメディアでいろんな言語があふれていれば興味持ってやりたいと思う子どもが増えると思うが。そういう装置も紹介できる機能もあればいい。

○施設・設備

- ・親子で行けてくつろげるような図書館に。子どもコーナーと大人コーナーとの場を違えて配慮したものにす。
- ・フロアに座り込んで読める様なスペースがあるといい。
- ・窓から季節の移ろいや緑が見えるような環境。
- ・環境も含めて、香美市の建物としてみんなが集えるようなものを。
- ・図書館のスペースを使って多彩な催しができる。美術館がスペースを使う機会を利用して図書館が持つ図書や情報を活かす。

- ・古い図書も書庫に置き、新しいものを探しやすいようにゆとりをもって配置する。古い図書は司書やサポーターに頼んで出してもらい、ということができれば。一定の収蔵力が必要。
- ・赤ちゃんの絵本は読む期間はとても短い。保育所の中にある子育て支援センターを図書館に持ってきて、仕掛け絵本など高額な本も、たっぷり使えるようにするなど、複合的に考える。
- ・長いスパンで使うので考えてつくらなければならない。電子書籍がどれぐらい普及するかよく分からない部分もあり、館内のレイアウトの変更も可能であるものを最初から考えておく。
- ・いろんな機能をつけていくと資金などの面で限界がある。
- ・高機能化するので、基盤を前へ進めるシステムに整えておかななくてはならない。(導入したシステムも)スピードが遅い回線のままでは意味がない。
- ・図書館は「静かに」という場であったが、現実的には難しい面がある。逆の発想でとにかく静かに読みたい人の為の部屋を構えることも県市合築図書館では採用している。
- ・図書館は勉強に使うイメージがある。課題や研究材料を探しに来て、部屋が静かでないと行けないので別の部屋を作る話もあるが、予算もあるし、一人当たりの負担額なども考慮して人口にあった規模にするべき。

○人員・ボランティアなど

- ・図書館にいろんな機能を付けようとするとう然人的支えが必要になる。予算が限られる中、どう高機能にするかということに知恵を集約する必要がある。
- ・図書館に知的好奇心を満たしたり、刺激をもらったりする機能に対して、市民が支えていく部分を考えなければ、機能は最終的には衰えていってしまう。
- ・行政が図書館をつくるというよりは、市民がつくってほしい。一定の機能を(行政に)つくってもらって、それを拡大してどのように運営するかは市民の側がどうするかの問題。
- ・前出の障害者を支えるための図書館機能をつけようとした場合、職員で足りないならサポーターがやるなどの機能がついているような図書館になればいいのではないか。
- ・いろいろな(事業展開については)望ましいが、職員配置計画をみると、計画の人数では酷。色々望むのであれば市民の協力なども欠かせない。
- ・工科大があることは、例えば知的障害の子ども向けのデジタル図書のようなものの開発など、市民だけでは厳しいが、上手に工科大と連携できれば可能性はあるのではないか。他の知的な機関を活かすのが最大の香美市での図書館のポイントになる。
- ・委員から出ている機能を専門職員で全部やるのは財政的にも無理な話。逆の発想で市民の方に支えていただく方向を拡大していくことだと思う。設置する前からサポーターを求めて市民の為の図書館にしたいというコンセプトを投げるとするのが重要。
- ・市民のサポーターを養成して一定の知識を持って携わってもらう。
- ・子ども司書をとった方がいいが、どこでどう活躍したらいいか分からなかったが、今、図書館で活躍している子どもたちは、市民の人たちとふれあって、喜んで読み聞かせやチラシをつくったりと、生き生きしている。そういう子どもたちを使っていたきたい。
- ・伊万里ではサポートのシステムが良くできていた。図書貸し出しなどの業務は職員が責任をもって行い、催しはボランティアグループが計画している。香美市には楽しみながら事を起こしてくれる人がいるので、その方たちがもう少し活動しやすい条件を整えていく。